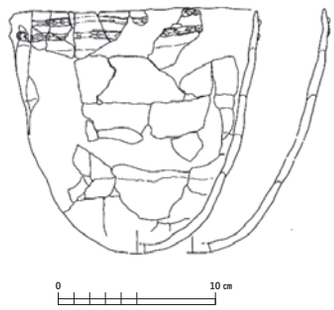
新宿区内の遺跡

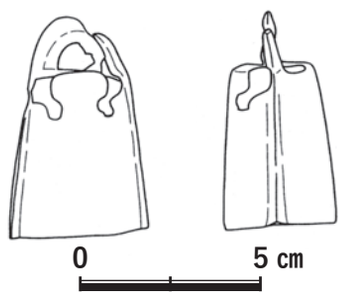
旧石器～古墳時代

新宿区内では、約３万年前の後期旧石器時代から遺跡が確認されています。旧石器時代の遺跡は妙正寺川№.１遺跡、下戸塚遺跡など、神田川・妙正寺川流域に点在しています。続く縄文時代は百人町三丁目西遺跡で草創期の隆起線文系土器が出土し、ほぼ全形が復元された貴重な事例となっています。中期の遺跡は落合遺跡、三栄町遺跡、下戸塚遺跡など大規模な集落遺跡があるほか、市谷加賀町二丁目遺跡では縄文時代中期と後期の人骨が発見され注目を集めました。



隆起線文系土器（区指定文化財）
百人町三丁目西遺跡出土

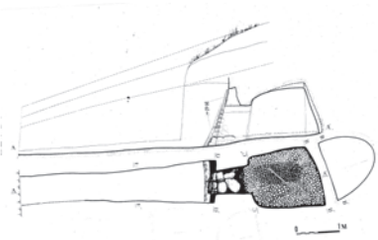
弥生時代は前期の遺跡は確認されておらず、中期になると白銀町西遺跡など少数が確認されるようになります。後期（２～３世紀）になると遺跡数は増え、集落の規模も大きくなります。下戸塚遺跡では直径 100m 以上の環濠集落が見つかり、西早稲田三丁目遺跡では住居跡と方形周溝墓が、高田馬場三丁目遺跡では住居跡の中から小銅鐸が発見されました。方形周溝墓の埋葬施設からはガラス玉や銅釧（どうくしろ）、鉄釧（てつくしろ）などが見つかっており、階層差が生まれていたことが推測されます。しかし、弥生時代後期に増加した集落は、古墳時代になると減少します。古墳時代はヤマト王権の成立を背景とする定型的な前方後円墳が、東北から九州まで広く出現する時代とされますが、新宿区内では前方後円墳は見つかっていません。古墳時代後期（5 世紀末）以降、遺跡が再び増加し、下戸塚遺跡で小円墳（埋葬施設は残存せず）が確認されている他、西早稲田三丁目遺跡、落合遺跡などでカマドを持つ竪穴住居跡が調査されています。　**※釧とは腕輪のこと**



小銅鐸（区指定文化財）
高田馬場三丁目遺跡出土

古代～中世

落合遺跡では奈良時代の集落跡が調査され、土器を焼くためと考えられる「土器焼成遺構」等、土師器（はじき）の焼成方法を解明する上で重要な発見がありました。下落合横穴墓は妙正寺川を望む台地斜面に作られた墓で、奈良時代の人骨や直刀が見つかりました。平安時代になると、仏教の広がりとともに火葬が行われるようになります。新宿区№.29 遺跡では、平安時代の蔵骨器（火葬の後、骨壷として使用された）が出土しています。



下落合横穴墓（３号墓）

中世の遺跡は、下戸塚遺跡で掘立柱建物群や井戸、柵列などが調査され、新宿六丁目遺跡では建物跡と墓域が、行元寺（ぎょうがんじ）跡では土坑墓や板碑が確認されています。

近世

近世（江戸時代）の遺跡は、江戸城外堀、玉川上水などの都市施設をはじめ、大名屋敷、旗本屋敷、組屋敷などの武家地、町屋、墓地、宿場など多岐にわたり、区内各地で確認されています。これらの調査成果は、文献史料と合わせて見ることで、江戸時代の人々の暮らしをより具体的に解明する手立てとして成果を上げています。

子どもの墓の副葬品（都指定文化財）
自證院遺跡出土

※令和 4 年 (2022)9 月 30 日現在、新宿区内には 163 か所の遺跡が確認されており、新宿区のウェブサイトで「新宿区埋蔵文化財包蔵地一覧」として公開されています。